

# 半過去と未完了解釈

—— 完了か未完了かの区別を含意しない過去時制 ——

川 島 浩 一 郎\*

## 0. はじめに

(1) の *il s'approchait...* や (2) の *je m'eclipsais* にみられるように、動詞が表す事態が未完了であるときに、半過去が用いられることがある。

(1) *Il s'approchait de la bière quand je l'ai arrêté.* (A. Camus, *L'Étranger*, Collection Folio, p.14)

「彼が棺に近づきかけたが、わたしはとめた。」

(2) *Fernstein me rappela alors que je m'eclipsais.* (M. Levy, *Le voleur d'ombres*, Collection Pocket, 2010, p.142)

「その場を立ち去りかけたわたしを、フェルンスタインが呼びとめた。」

(1) の *il s'approchait...* (半過去) は、彼が棺に近づく途上にあることを表している。(2) の *je m'eclipsais* (半過去) の使用は、わたしが立ち去る過程にあること、つまり、まだ立ち去り終えてはいないことに対応している。このように、半過去の存在が事態の未完了性の標示として解釈される事例は確かに

---

\* 福岡大学人文学部准教授

存在する。

半過去と未完了性の関係に対しては、大きく分けて2つの考え方がある。一方では、半過去に未完了性が恒常的に内在すると考える。この考え方によれば、半過去が未完了の事態を表しうるのは、半過去そのものに事態の未完了性が含意されているからである。もう一方では、半過去自体に未完了性の含意はないと考える。こちらの考え方では、半過去が未完了の事態に対応しうるのは、完了性の欠如（少なくとも事態の完了の標示ではないこと）による。

前者を、半過去に未完了性の積極的な存在を認めるという意味で「未完了説」と呼ぶことにしよう。これに対して、後者を、完了性の欠如に着目しているという含みをこめて「非完了説」と呼ぶことにしよう。

半過去が「未完了」であるか「非完了」であるかは、半過去という記号素の存在意義に直結した、避けて通ることのできない論点である。「未完了説」と「非完了説」のいずれを主張するにせよ、その論拠・根拠を示すことが、半過去の分析においては不可欠である。(1)や(2)のような、半過去が未完了の事態に対応する事例を示すだけでは、「未完了説」の論拠にも「非完了説」の論拠にもならない。「未完了説」であっても「非完了説」であっても、そのような事例の存在はすでに折り込み済みだからである<sup>1)</sup>。

本稿の主な目的は、半過去が「未完了」であるか「非完了」であるかを、具体的な観察に基づいて考察することである。結論を先取りして言えば、半過去という記号素そのものには、未完了性は内在しない。つまり本稿では「非完了説」を主張する。

論述の手順は次の通りである。1.では、半過去の使用が未完了の事態に対応する事例が存在することを確認する。2.では逆に、半過去の使用が完了した事態に対応する事例が存在することを確認する。3.では、半過去という記号素が、事態が完了であるか未完了であるかの区別を含意しないことを示す。4.では、完了か未完了かの区別が半過去にとって非本質的なパラメータであることを示

す。そして 5. では、半過去の使用が、完了した事態にも未完了の事態にも対応しない事例を検討する。

## 1. 未完了の事例

半過去の使用が、動詞が表す事態の未完了性に対応できることを確認しておこう。

- (3) Brendan montra du doigt l'ambulance qui *disparaissait* au coin de la rue. (T. Breton & D. Beneich, *Softwar*, Collection Le Livre de Poche, 1984, p.307)

「ブレンダンは、角を曲がりかけている救急車を指差した。」

- (4) Le corps d'Arthur se leva dans un ultime effort, pour retenir la vie qui s'en *allait*. (M. Levy, *Vous revoir*, Collection Pocket, 2005, p. 166)

「アーサーの身体は、なくなりつつある生命を引き止めようと、最後の力をふりしぼって立ち上がった。」

- (5) J'étais fou d'elle parce qu'elle m'*échappait*. (F. Beigbeder, *L'amour dure trois ans*, Collection Folio, 1997, p.122)

「彼女が離れつつあったから、わたしは彼女に夢中になっていた。」

- (6) Vous voulez un café ? J'en *faisais* justement. (A. H. Japp, *La saison barbare*, Collection J'ai lu, 2003, p.330)

「コーヒーはいりませんか？ 丁度いれていたところだったんです。」

- (7) Je peux vous déposer ? Je *partais* pour le bureau. (F. Sagan, *Aimez-vous Brahms...*, Collection Pocket, 1959, p.19)

「送って行きましょうか？ 会社に行くところだったんですよ。」

(3) の ... qui disparaissait...は、未完了の事態を表していると考えてよい。救急車が「姿を消す」という事態が完了してしまえば、その救急車を指差すことはできないからである。同様に(4)の ... qui s'en allait も未完了の事態である。生命がなくなるという事態が完了してしまえば、それを引き止めることもできなくなる。(5)の elle m'échappait には「彼女がわたしから離れつつあった」という未完了の解釈がふさわしい。(6)の j'en faisais justement は「丁度入れていたところだった」と解釈することができる。(7)の je partais...は「行くところだった」という意味だから、この事態はまだ完了してはいない。

これらの用例にみられるように、半過去の使用は、動詞の表す事態の未完了性に対応することができる。ただし、半過去の存在が必ず未完了の解釈と結び付くわけではない。次の 2. では、半過去が、動詞が表す事態が完了している場合にも現れうることを観察する。

## 2. 完了の事例

半過去の使用は、動詞が表す事態の完了性に対応することができる。

(8) Il y a quarante ans, le 27 août 1965, le Corbusier *mourait*. (*Elle*, 19 septembre 2005, p.65)

「40年前、1965年8月27日に、ル・コルビュジェは亡くなった。」

(9) J'ai bu un verre de whisky que l'Amiral *poussait* devant moi. (G. Simenon, *Les sept minutes*, Collection Folio, 1965, p.55)

「わたしは、提督が差し出した一杯のウィスキーを飲んだ。」

(10) Jonathan griffonna sur un papier l'adresse qui lui *dictait* Peter. (M. Levy, *La prochaine fois*, Collection Pocket, 2004, p.154)

「ジョナサンは、ピーターが言った住所を紙に書き留めた。」

- (11) Mais un instant plus tard le verre *tombait*, [...]. (J. Echenoz, *Cherokee*, Minuit, 1983/2003, p.165)

「しかし一瞬の後、グラスは地面に落ちていた、[...]。」

- (12) Cinq minutes après, les trois autres *arrivaient*. (Ph. Djan, *37° 2 le matin*, Collection J'ai lu, 1985, p.300)

「5分後、他の3人が到着した、[...]。」

- (13) Au bout de cinq mois, on se *mariait* civilement. (*Elle*, 7 mars 2005, p.90)

「5ヶ月後に、わたしたちは結婚した。」

(8) の *le Corbusier mourait* は未完了の事態 (亡くなりつつあった) ではなく、完了した事態 (亡くなった) として解釈することができる。(9) の *l'Amiral poussait...* は、完了した事態であると解釈せざるをえない<sup>2)</sup>。移動中のグラスをとりあげて、ウィスキーを飲んだとは考えにくいからである。(10) においては、... *lui dictait Peter* によって表される事態が完了したから、住所を書き留めることができたのである。(11) の *le verre tombait*, (12) の *les trois autres arrivaient*, (13) の *on se mariait...* もそれぞれ、完了した事態として理解することが可能である<sup>3)</sup>。

以上のような用例の存在から、半過去が、動詞が表す事態が完了している場合にも使われる可能性があることは明らかである。

- (14) Enfermé depuis des mois, Chahine *mourait* un peu plus chaque jour. (M. Levy, *Les enfants de la liberté*, Collection Pocket, 2007, p. 185)

「何ヶ月も閉じ込められて、カイーンは毎日少しずつ死につつあった。」

(8) の *le Corbusier mourait* は「完了した過去の事態」に対応している。これに対して (14) の *Chahine mourait* は「未完了の過去の事態」として解釈される（まだ亡くなってはいない）。そして「完了した過去の事態」と「未完了の過去の事態」の共通部分は「過去の事態」であることに他ならない<sup>4)</sup>。この考察は、半過去が完了か未完了かの区別を含意しない過去時制であることを示唆している（次の 3. を参照）。

### 3. 過去時制としての半過去

半過去は、完了か未完了かの区別を含意しない過去時制だと考えられる。

(15) *Il est 14 heures, moment du ravitaillement.* (*Elle*, 18 juillet 2005, p. 46)

「14 時，燃料補給の時間だ。」

(16) *Il était 14 heures.* (T. Jonquet, *Du passé faisons table rase*, Collection Folio, 2006, p.164)

「14 時だった。」

(15) の *il est 14 heures* が現在の時刻への言及であるのに対して、(16) の *il était 14 heures* は過去の時刻への言及である。つまり (16) での半過去の使用は *il est 14 heures* に「過去性」を付け加えているだけである<sup>5)</sup>。そこに、動詞が表す事態が完了であるか未完了であるかの区別が介在する余地はない。

(17) *Le patron est un ami.* (B. Aubert, *Funérarium*, Collection Points, 2002, p.20)

「店の主人が友達だ。」

- (18) Le patron *était* un ami, [...]. (*Du passé faisons table rase*, p.214)  
「店の主人が友達だった。」
- (19) Il y *a* du vent. (A. Gavaldà, *Je l'aimais*, Collection J'ai lu, 2002, p.34)  
「風がふいている。」
- (20) Il y *avait* du vent. (*Funérarium*, p.100)  
「風がふいていた。」

(17) と (18) の違いは「過去性」の有無である。半過去を用いた (18) の *le patron était un ami* には、(17) の *le patron est un ami* にはない「過去性」がある。(18) における半過去の存在は、(17) に完了性も未完了性も付け加えてはいない。同じことが (19) と (20) においても言える。(19) と (20) の関係に、完了性や未完了性の有無は関与しない。(19) の *il y a du vent* に、完了・未完了の区別を含意しない単なる「過去性」を加えたものが、(20) の *il y avait du vent* である。

- (21) [...], elle *vient* une fois par semaine, le mardi matin. (F. Vargas, *Pars vite et reviens tard*, Collection J'ai lu, 2001, p.127)  
「[...]、彼女は週に一度、火曜の朝に来る。」
- (22) Mado *venait* deux ou trois jours par semaine. (G. Simenon, *L'évadé*, Collection Folio, 1936, p.55)  
「マドは週に二度か三度来ていた。」

(21) の *elle vient...* は、いわゆる「現在の習慣」を表している。これに対して (22) の *Mado venait...* は「過去の習慣」を表している。「現在の習慣」と「過去の習慣」の相違は「現在」か「過去」かだけであって、そこに完了か未完了かという区別が介在する余地はない。(22) において半過去が用いられて

いるのは、(22)の事態が「現在」ではなく「過去」であるからに他ならない。

- (23) Avant j'étais un danger pour eux, aujourd'hui je suis une honte. (T. Benacquista, *Malavita encore*, Collection Folio, 2008, p.332)

「わたしは以前、彼らにとっての脅威だったが、今では彼らにとっての恥だ。」

- (24) Maman est toujours belle mais là, elle était carrément jolie. (*Le voleur d'ombres*, p.54)

「母は今でも美しいが、昔の彼女はとっても可愛かった。」

- (25) Elle rit comme elle riait avant, lorsque nous nous aimions. (G. Musso, *La fille de papier*, Collection Pocket, 2010, p.253)

「彼女は、昔わたしたちが愛し合っていた頃と同じように笑った。」

(23)のj'étais..., (24)のelle était..., (25)のelle riaitで半過去が用いられているのは、どれも「現在」に「過去」を対比させるためである。これらの半過去の存在理由は「過去性の標示」以上でも以下でもない。動詞が表す事態が完了であるか未完了であるかの区別は無関係である。

ここで観察した半過去は「過去性の標示」のためだけに用いられている。これらの半過去の使用には、動詞が表す事態が完了しているか未完了であるかの区別は関与しない。このことは、半過去が、完了か未完了かの区別を含意しない過去時制であることを示唆している<sup>6)</sup>。

半過去の使用にともなって「過去性の標示」以外の何らかの特性X(たとえば未完了性)が生じる事例があると仮定してみよう(解釈としてはありうる)。しかし、半過去が「過去性の標示」のためだけに使用されている事例が存在する以上、この特性Xは半過去にとって恒常的な特性ではないと考えざるをえない。半過去の用法に「過去性の標示」の事例と「過去性の標示+X」の事例



があるとするれば、半過去にとってXが恒常的な特性でないことは自明である。

実際、次の4.で検討するように、半過去を用いた動詞は完了した事態を表すこともあれば、未完了の事態を表すこともある。この事実は、完了性や未完了性が、半過去にとって本質的な特性ではないことを明瞭に示している。

#### 4. 相反する特性：完了性と未完了性

一般に、同一の表意単位の実現形にXという特性と非Xという特性の両方が見られるとすれば、それはXがその表意単位にとって本質的なパラメータではないことを意味する。たとえば、リンゴは赤い色をしていることもあれば、赤い色をしていないこともある（たとえば青リンゴの存在）。このとき、色の赤さはリンゴという表意単位にとって非本質的な性質であると言ってよい（赤くても赤くなくてもリンゴはリンゴ）。

半過去を用いた動詞は完了した事態を表すこともあれば、未完了の事態を表すこともある。したがって、完了か未完了かの区別は、半過去にとって非本質的なパラメータであると考えざるをえない。

- (26) [...] : quand Sartre *terminait* une pièce, elle était immédiatement montée, [...]. (*Elle*, 30 mai 2005, p.74)

「[...]、サルトルが戯曲を書き終わると、その戯曲はすぐに上演されたものだった、[...]。」

- (27) L'ambassadeur *terminait* une conversation téléphonique lorsque Voronkof entra dans son bureau. (*Softwar*, p.193)

「大使が電話を終えようとしていたところに、ヴォロフが部屋に入ってきた。」

- (28) Le détective privé était mort. Annabel *arrivait* trop tard. (M. Chat-

tam, *Maléfices*, Collection Pocket, 2004, p.604)

「私立探偵は死んでいた。アナベルの到着は遅すぎたのだ。」

- (29) Le type était encore assez loin mais il *arrivait*, [...]. (Ph. Djian, *Zone érogène*, Collection J'ai lu, 1984, p.92)

「その男はまだ遠くにいた、しかし近づきつつあった、[...]。」

- (30) Parfois, quand il *rentrait*, Betty dormait encore. (*37° 2 le matin*, p. 76)

「ときおり、彼が家に帰ると、ベティはまだ眠っていた。」

- (31) — Qui l'a découvert ? — Un gardien de nuit qui *rentrait*. (F. Vargas, *L'homme à l'envers*, Collection J'ai lu, 1999, p.233)

「誰がそれを発見したのですか?」「帰宅途中の夜警です。」

(26) の Sartre terminait...が完了した事態であるのに対して、(27) の l'ambassadeur terminait...は未完了の事態として解釈することができる。(28) の Anabel arrivait...は完了した事態だが、(29) の il arrivait は未完了の事態である。また (30) の il rentrait において事態が完了しているのに対して、(31) の... qui rentrait において事態は完了していない (帰宅途中の夜警)。

これらの用例は、完了か未完了かの区別が半過去にとって本質的な特性ではないことを明瞭に示している (3. を参照)。「未完了説」では (0. を参照)、半過去に常に内在する未完了性が何らかの要因で消滅したり無視されたり、あるいは完了性に変化したりすると主張するのかもしれない<sup>7)</sup>。しかし、このような考え方が許されるのであれば、半過去には完了性が含意されていると言ってもよいことになる (内在する完了性が、場合によって消滅したり無視されたり、未完了性に変化したりすると言えばよい)。

また「未完了説」は事態の未完了性が半過去に恒常的に存在することを主張しているのだから、未完了性を失った表意単位を半過去と同一の表意単位だと

言うことができない<sup>8)</sup>。「未完了説」は必然的に、事態の完了性を表す半過去と、事態の未完了性を表す半過去は別の表意単位（同音異義）であるという、どちらかと言えばつまらない結論に至ってしまう。

したがって、半過去は事態の完了性も未完了性も含意しない記号素だと考えざるをえない。実際、次の 5. で検討するように、完了した事態にも未完了の事態にも対応しない半過去の用例は、ごく普通に存在する。

## 5. 非完了の事例

半過去の使用には、それが完了した事態にも未完了の事態にも対応しない場合がある。

- (32) Il *était* 3 heures. (Boileau-Narcejac, *Les victimes*, Collection J'ai lu, 1964, p.32)

「3時でした。」

- (33) Elle *avait* des yeux bleu sombre. (F. Sagan, *Bonjour tristesse*, Collection Le Livre de Poche, 1954, p.39)

「彼女は暗い青色の目をしていた。」

たとえば (32) の il *était* 3 heures における半過去は、事態の完了を標示してはいない。3時になっていることを、ある種の事態の完了とみなすことはできるかもしれない。しかし、その点は現在形の il *est* 3 heures でも同じなのだから、il *est* 3 heures あるいは il *était* 3 heures が完了した事態であるかどうかという議論は、半過去の問題とは無関係である。

(32) の il *était* 3 heures はまた、未完了の事態でもない。かりに (32) が未完了の事態であれば、まだ3時ではないが3時になりつつあったというような

解釈になるはずである（1.を参照）。

(33) についても、同じことが言える。(33) の elle avait...は完了した事態でも未完了の事態でもない。現在形の elle a des yeux bleu sombre と同様に、(33) に完了の含意はない。また未完了の事態であれば、(33) は、彼女は暗い青色の目を持ちつつあったというような解釈でなければならないだろう（1.を参照）。

(32) や (33) を未完了の事態と解釈することに無理があるのは、これらが、そもそも完了を想定した事態ではないからである。言語外現実で実際に完了するかどうかはともかくとして、言語使用者によって完了するはずのものとして捉えられた事態が完了していない場合に、事態が未完了だと言うことができる<sup>9)</sup>。事態が完了する可能性が想定されていない場合には、事態の未完了もありえない（少なくとも、それを「未完了」と呼ぶ意味がない）。たとえば、ある男が終わる可能性が想定されない仕事に従事していたとしよう。このときに「彼はそのその仕事を終えつつある」とは言うのは奇妙である。

(32) や (33) のような事例は、半過去の用例としてはごく通常のものである。半過去の使用が事態の完了にも未完了にも対応しないことは、決して珍しくはない。半過去は「非完了」的であると同時に「非未完了」的でもある。

## 6. まとめ

半過去は、完了か未完了かの区別を含意しない過去時制である。したがって、半過去に未完了特性の存在を認める「未完了説」は正しくない<sup>10)</sup>。

半過去は「過去時制 + 完了特性」でもなければ「過去時制 + 未完了特性」でもなく、単なる「過去時制」である。つまり半過去の使用が未完了の事態に対応することができるのは、半過去が完了性を含意しないからに他ならない。

半過去と複合過去の二者択一においては、複合過去との対比によって、半過

去に未完了の含みが特に生じるかもしれない<sup>11)</sup>。しかしこのことは、半過去のステイタスがまさに「(複合過去が含意するような) 完了性の欠如」であることを明確に示している。

### [註]

- 1) 「未完了説」と「非完了説」は対等ではない。「非完了説」は半過去が未完了の事態に対応することを否定していないのだから、「未完了説」で説明できることはすべて「非完了説」でも説明可能である。したがって「未完了説」が「非完了説」を論駁することは、原理的に不可能だと思われる。「未完了説」の立場の論考が「非完了説」に言及することが少ないのは（単なる印象だが、そのように感じられる）、もしかしたらそのせいかもしれない。
- 2) 例文（8）や（9）の半過去は「絵画的半過去」と呼ばれる。
- 3) 例文（10）から（13）の半過去は「切断の半過去」と呼ばれる。
- 4) ここでは、ある表意単位が示す諸用法の「共通部分」だけが、その表意単位の本質に関連するという前提で考察を行っている。これはごく常識的な前提である。「共通部分」以外の部分は、現れることもあれば現れないこともある偶発的な存在にすぎないからである。
- 5) 本稿では立ち入らないが、いわゆる「非現実」や「丁寧」などの叙法的な解釈を持つ半過去もまた事態の「過去性」と関連していると考えられる。詳細は川島（2006）を参照。
- 6) 「過去時制」を他の概念（たとえば「過去への視点の移動」）におき換えたとしても、完了性や未完了性が半過去にとって恒常的な存在でないことに変わりはない。
- 7) 男性の人間（homme）と女性の人間（femme）の区別がなくなれば、共通部分の人間（homme）が残る。この場合は、homme に内在する男性とい

う性質が消えたり無視されたりするわけではなく、もともと homme という記号素が男性と女性の区別を含意していないと考えるべきである。また、homme が男性ではなく女性を意味するということが、おそらくないのではないだろうか。

- 8) リンゴは赤いものだと主張する人は、赤くないリンゴの存在を認めることができないう。この人は、赤いリンゴと赤くないリンゴを同じ果物だと言うことができない。
- 9) 言語外現実において、事態が完了しうるかそうでないかは、本質的な問題ではない。問題は、言語使用者がそれをどう捉えるかである。物理的に完了するはずの事態であっても、もし言語使用者が完了しない事態として捉えたならば、それは完了しない事態である。
- 10) 大過去において複合過去と半過去は共起する。かりに半過去自体に事態の未完了性が含意されているとすれば、未完了性が、複合過去によって標示される事態の完了性と共起することになる。この矛盾を「未完了説」はどのように説明するのだろうか。
- 11) 半過去と複合過去は、相互排他的には対立しない。これらは、大過去というかたちで共起することができる。半過去と複合過去の対立は、現在形を仲立ちとした間接的な対立である。詳細は川島（2006）を参照。

#### [参考文献]

- 阿部 宏（1987）「フランス語の半過去について」『フランス文学語学研究』6（早稲田大学大学院同誌刊行会），31-41。
- 阿部 宏（1989）「Je t'attendais 型の半過去について」『フランス語学研究』23（日本フランス語学会），55-59。
- Abé, H. (1993) "Fonctions de pendant + syntagme nominal", *Actes du XXe Congrès International de Linguistique et de Philologie Romanes* 1, Francke, 33-

43.

- 阿部 宏, 春木仁孝, 前島和也 (2000) 「半過去研究」『フランス語学研究』34 (日本フランス語学会), 56-69.
- 安西記世子 (2006) 「語りにおける複合過去に関する一考察」『シンポジオン — 高岡幸一教授退職記念論文集 —』朝日出版社, 3-12.
- 春木仁孝 (1991) 「Je ne savais pas que c'était comme ça. — 再確認の半過去 —」『フランス語フランス文学研究』59 (日本フランス語フランス文学会), 76-88.
- 春木仁孝 (1999) 「半過去の統一的理解を目指して」『フランス語学研究』33 (日本フランス語学会), 15-26.
- 春木仁孝 (2001) 「J'ai rencontré un réfugié qui arrivait du Kosovo. — 半過去の属性付与機能について —」『フランス語フランス文学研究』77 (日本フランス語フランス文学会), 84-95.
- 春木仁孝 (2004) 「事実認識の方策としての半過去 — 絵画的半過去を中心として —」『言語文化研究』30 (大阪大学), 229-251.
- 市川雅己 (1988) 「半過去の本質的機能について — 「物語の半過去」(Imparfait narratif) を通して —」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』5, 81-93.
- 市川雅己 (1999) 「半過去の機能について」『フランス語学研究』33 (日本フランス語学会), 65-69.
- 川島浩一郎 (2005) 「フランス語の「現在形」をめぐる一考察」『福岡大学研究部論集』A5-1, 13-28.
- 川島浩一郎 (2006) 「フランス語の複合過去と半過去に関する一考察 — 時制とアスペクトの間接的対立 —」『福岡大学研究部論集』A6-3, 37-61.
- 前島和也 (1997) 「時制と人称：半過去の場合」『フランス語フランス文学』25 (慶應義塾大学日吉紀要), 117-144.

- 西村牧夫 (1979) 「発話時制空間と半過去・大過去」『フランス語フランス文学論集』15 (西南学院大学), 81-111.
- 西村牧夫 (1985) 「現在に関わる大過去」『フランス語学の諸問題』三修社, 50-62.
- Okubo, N. (1999) “Le passé composé et le passé simple : leur concurrence avec leur temps composé”, *Bulletin d'Études de Linguistique Française* 33, 1-14.
- 大久保伸子 (2002) 「切断の半過去について — Huit jours plus tard, elle mourait...」『フランス語学研究』36 (日本フランス語学会), 14-29.
- 坂上るり子 (1997) 「Quand 節と半過去について」『年報・フランス研究』31 (関西学院大学フランス学会), 39-51.
- 坂上るり子 (1998) 「未来に関わる半過去の用法について」『年報・フランス研究』32 (関西学院大学フランス学会), 29-41.
- 佐藤正明 (1981) 「時制の emploi modal への移行 — 半過去を中心として —」『フランス語学研究』15 (日本フランス語学会), 88-95.
- 塩田明子 (1996) 「半過去と話の「場」」『ふらんぼー』23 (東京外国語大学フランス語研究室), 23-40.
- 田中善英 (2006) 『フランス語における複合時制の文法』早美出版社.
- 松澤水戸 (2011) 「日本人初級フランス語学習者の過去 2 時制の選択 — 複合過去と半過去 —」『ふらんぼー』36 (東京外国語大学フランス語研究室), 34-52.
- 渡瀬嘉朗 (1985) 「動詞の「時」と「相」」『フランス語学の諸問題』三修社, 38-49.
- 渡瀬嘉朗 (1990) 「「未完了」特性について」『東京外国語大学論集』41, 23-38.
- 渡瀬嘉朗 (1994) 「Actuel と Inactuel — 「現在」と「半過去」, 「大過去」—」



『東京外国語大学論集』48, 43-58.

渡瀬嘉朗（1995）「時制の理論のために — 文意の分析と時制の対立 —」『東京外国語大学論集』50, 35-50.

渡瀬嘉朗（1998）「二つの過去形 — 意味の枠組みの明確な過去，枠組みのない過去 —」『フランス語を考える フランス語学の諸問題 II』三修社, 8-21.

渡邊淳也（2007）「間一髪の半過去をめぐって」『文藝言語研究言語篇』52（筑波大学），151-175.

渡邊淳也（2007）「フランス語の「丁寧の半過去」と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法」『フランス語学研究』41（日本フランス語学会），54-59.

渡邊淳也（2008）「分岐的時間の表象を用いた時制・モダリティの連関の説明の試み」『文藝言語研究言語篇』54（筑波大学），15-44.

渡邊淳也（2009）「時制とモダリティの連関への新たな接近法」『フランス語学研究』43（日本フランス語学会），77-83.

渡邊淳也（2012）「叙想的時制と叙想的アスペクト」『文藝言語研究言語篇』61（筑波大学）（近刊）.

山村ひろみ（2006）「アガサ・クリスティの推理短編小説における過去の表現 — フランス語とスペイン語の対照の観点から —」『比較社会文化』12（九州大学），39-56.

\*本稿は渡瀬の諸論文（参考文献を参照）に触発・啓蒙されて執筆した。もちろん間違いや誤解のすべては筆者自身のものである。